銀河戦記　～童貞男は英雄となってリア充を目指す～

神城匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀河戦記　～童貞男は英雄となってリア充を目指す～

【Ｎコード】
Ｎ３４９４ＢＡ

【作者名】
神城匠

【あらすじ】
童貞のまま二十歳になった青年上村光太郎は、風俗店に向かう途中、人語を操るフェレットと出会い、「君だけが持つ特殊な力で僕たちの世界を救ってほしい。英雄になってほしい」と言われる。風俗店で童貞卒業を果たすより、英雄となって堂々と童貞を卒業した方が格好いいという理由で異世界に赴くことを決意した彼は、とある銀河系にある小さな王国ヴェスパニアに転生する。
童貞卒業を果たすために英雄となることを決意した彼は、まずはヴェスパニア王国に迫る危機に立ち向かうのだが……。

前回投稿した拙作「俺に銀河を救えるか？」の改訂版です。

序話　全ての始まり

太陽系第三惑星・地球が属する天の川銀河から、さらに彼方へ行ったところに、とある銀河系が存在し、その辺境に一つの国があった。

その名は、ヴェスパニア王国と言う。

緑豊かな惑星アストレアを首都星とし、その周りに犇めく幾つかの惑星と、それに付随する衛星を支配する中堅国家だが、この国は目下危機に瀕している。というのも、建国以来、愚直に守り続けてきた文民統治体制と、学歴至上主義を基盤とした官僚国家体制が仇となり、鈍重かつ頭でっかちな軍事小国と化してしまったこの国に、近隣の大国ジュピウス帝国が目をつけ始めたからである。

ジュピウスは、ヴェスパニア征服を実現するべく宇宙艦隊の整備増強に力を注ぎ、その戦力は既に艦艇五万隻、人数にして五〇〇万人規模に達したという。ジュピウスの宇宙艦隊は、ヴェスパニアに程近い幾つかの小惑星や衛星を次々と占領下に置き、軍事基地を設営するなど、征服に向けた準備を着実に整えつつあるというが、それなのにヴェスパニア王国の上層部は、相も変わらず軍の存在を軽んじ、いつもの如く貢物を捧げさえすればジュピウスの凶悪な牙から逃れることができると本当に信じ込んでいるようなのであった。

だが、ヴェスパニア支配下の諸惑星、諸衛星の地下に豊富な資源が眠っている以上、貪欲なジュピウスが些細な貢物程度で手をひっこめてくれるはずがない。もはや、どんな外交努力も、国を守る上では何の役にも立たないのだということに気が付いたヴェスパニア

の王子アウグスト・ディ・ヴェスパニアは、まず王を説得して軍の強化に力を注ごうとしたが、文民支配の妄執に凝り固まった官僚集団に阻まれて、諦めざるを得なかった。

しかし、憂国の志に燃えあがるアウグスト王子は、方針を変更し、今度は一つの伝説に全ての未来を託してみることにした。

その伝説と言うのは、ヴェスパニア王国を作り上げた初代国王ジュリアン・ディ・ヴェスパニアが遺した遺言書に記されていたもので、曰く、

『余の治世より一〇〇〇年の月日を経た後、我が王国は危急存亡の秋を迎えるであろう。その時、余の末裔たちが、もはや我が王国に未練なしと判断するのであれば、潔く滅びの道を歩むのもよかろう。だが、なお未練があるのであれば、異界への門を開き、神の御心の思し召すままに?英雄?を召喚するのだ。その者とともに戦えば、我が王国には再び一〇〇〇年の繁栄が蘇るであろう』

とあった。

そして今、隻眼の悪魔王と言われたジュリアン大王が崩じて一〇〇〇年の月日が過ぎた。大王の遺言は歴代の国王に引き継がれながら、次第に伝説と化していき、ついには誰からも相手にされなくなっていたが、アウグスト王子は、今こそが遺言に記された?危急存亡の秋?であると考えたのである。

そこで王子は、神官団を呼び寄せた上で、如何に?英雄?を召喚すればよいのかを尋ねた。

神官長は答えた。

「殿下の血と眼が必要でございます」

と。

王子は頷いた。王国のためであれば、いつでもこの身を捧げる覚

悟はできている。そんな勇ましい王子の発言に満足した神官長は、配下の神官団とともに王都アストレア・シティより北に三〇〇キロほど行った先にあるジュリアン大王の霊廟に赴くと、その地下にある壮麗な地下宮殿の中へと厳かに入っていった。

祭壇は地下宮殿の奥深くに安置されていた。
トカゲのような形をした巨大な石像の下に、人が一人寝転ぶには十分な大きさの石のベッドがあった。トカゲの石像は、よく見ると、片方の目がなく、その小さな手のひらの上には、ぽつねんと一つの壺が置かれていた。
神官長は言った。

「召喚の儀は、正しき王家の血脈を受け継ぎし者の力なくしては行えませぬ。殿下におかれましては、その御身体に流れる血と、今一つ、その透き通るような瞳の一つを神に捧げてくださいますように」

と。
アウグスト王子は静かに頷き、神官長に促されるまま、石のベッドの上に寝転んだ。すると、居並ぶ神官たちが、呪文を唱えながら、わらわら王子の周りに歩み寄ってきて、そして神官長はおもむろに短剣を懐から取り出すと、麻酔もせずに王子の左目から眼球をくりぬいた。
神官長は、くりぬいた眼球を、トカゲの目に埋め込み、流れた血は、壺の中に注ぎ込んだ。
その上で、神官長及び神官たちは、大仰に呪文を唱え始めるのだった。
すると。

天地が蠢き、時空が歪みだした。
全てが終わった時、トカゲの頭の上に一匹のフェレットがひょっこりと突っ立っていて、居並ぶ王子と神官たちをじろりと見下ろしていた。

「さあ、神の分身よ。異界の門は今ここに開かれたり。異界に赴き、神より賜りしその特殊な力を用いて、我らを導き救う英雄を呼び寄せたまえ！」

神官長が声高にそんな風に叫ぶと、フェレット……のように見えた気高き小動物は、歪みだした時空の狭間へと勢いよく飛び込んでいって、王子たちの目の前から完全に姿を消した。

時に銀河暦二〇〇一年九月六日のことである。

第1話　童貞男の決心

もう二十歳になるというのに、未だ年齢＝彼女いない歴となっている青年上村光太郎は、その日、ついに童貞を捨て去る決意を固めて、大学にも行かずに色町に繰り出すことにした。

この日のために、夜も眠らず昼寝して、バイトを重ねてお金をためてきた。その戦果たる十万円が、今、彼の財布の中に唸っている。昨晩、慌ててコンビニに駆けこんでＡＴＭから手数料込で引き出してきた、大切な大切な軍資金であった。

これだけあれば、少なくとも二度ぐらいは楽しめるだろう。いずれにしても、これでようやく童貞を卒業できるのだ。お金の力で叶える……と言うのが少しだけ気に食わないが、このまま何もしなければ、十年後も童貞のままで、魔法使いへと昇華してしまいそうで怖かったのだ。

車に飛び乗り、ネットで調べた店の住所を打ち込む。

所要時間は二十分と出る。

エンジンをかけ、ゆっくりとアクセルを踏み込むと、車は自然と動き出した。

「……いよいよ、か」

時計を見ると、午前十時ジャスト。

今頃大学では普通に講義が行われている頃だろう。今日の講義に出席しなければ単位は取得できないが、童貞を卒業できることに比べればさしたる問題ではない。友人には風邪をこじらせたから休むとメールを送ってあるし、友人が上手くやってくれれば、出席したと教授を誤魔化すことも不可能ではなかった。

「いざ、出陣だ！」

意を決し、前を見る。

そこに広がっている光景は、相変わらずいつもと同じだった。閑静な住宅街、そこを出ると、長閑な田園風景が広がり、やがて商店街が軒を連ねる町が見えてきた。

空は曇っている。

いつ、雨が降り出しても不思議はない感じ。

童貞卒業という記念すべき日には全く相応しくない空模様に光太郎の気分は下降気味。

その時、急に信号が赤になった。

慌ててブレーキを踏み、車はその場に急停止する。

「フゥ」

停止線は軽く超えてしまったが、辛うじてセーフだろう。

そう思って安堵のため息を吐いた、まさにその時。

「ねぇ、君にお願いがあるんだよ。これは非常に大事なお願いなんだけど、聞いてくれるかい？」

そんな声が、どこからともなく響いてきて、彼はギョッとなって周りを見回した。しかし、ここは車の中だ。誰もいるはずがない。

「今、僕たちの世界は危機に瀕しているんだ。だから君の力がいるんだ。君の力で僕たちの世界を救ってくれないかい？」

それなのに、やはり声がして、光太郎の背筋は一瞬にして凍りついた。

まさか、幻聴？　だとすると、ついに俺おわた！

「あ、もしかして僕のことに気づいてない？　ここだよ、目の前にいるんだよ」

声の主は、ひょこひょこと歩いてきて、ボンネットの上にちょこんと腰を下ろした。

それは、真っ白なネズミのように見えるが、フェレットにも見える。濁り一つない純白の毛並みが特徴的なそいつは、にっこりと微笑みながら光太郎の顔をジッと見つめている。

「気付いた？　で、話は元に戻るんだけど、僕は君の力が欲しいんだ。僕たちの世界を救えるのは君だけだからね。まあ、別に難しいことじゃないんだ。うん、って頷いてくれさえすれば後は僕たちが万事整えるからさ。ね、僕たちを助けてよ。僕たちは英雄を欲しているんだ」

そんな風に言うこの小動物は、家の屋根裏とか店や工場の片隅などによく巣食っている薄汚いドブネズミとは全てにおいて違っていた。格好もそうだが、漂う気品、風格……何もかもが。

しかし、光太郎にとってそんなことははっきり言ってどうでもよいことだった。どこから見てもネズミの範疇を超え得ない小動物が平然と人語を操っているという厳然たる事実に、彼は驚きを隠せないでいたのだった。

「……は？」

呆然状態の光太郎の口から飛び出した第一声は、そんな間の抜けた問いである。

「あ、あのさ、な、何言ってんだか全然分かんないんだけど。ってかお前なに？　何で喋ってんの？　い、いや、俺、夢でも見てんのかな？　初めて童貞を卒業できるからって舞い上がりすぎて幻でも見てんのか？　うわぁ、いよいよ俺も終わりかぁ……。いろんな意味で終わってるよ、俺……」

「童貞？　卒業？　僕も君がいったい何を口走っているのかよく分からないんだけど、とにかく、これは夢でも幻でもないんだよ。現実なんだ」

小動物はそう言ってにっこりと微笑んでみせた。

しかし……。

ネズミに限らず人間以外の存在が人語を自在に操るなどというメルヘンチックな世界からは、十年近くも昔に卒業したはずの光太郎には、目の前の光景や現実が理解できない。というよりむしろ理解したくなかった。納得したくなかった。

「でもね、面白いと思うよ。楽しいと思うよ。怖いけどスリルはあるけど、変哲のない人生を何気なく過ごすよりはよっぽど有意義だと思うよ。何しろ君は、英雄になれるんだから。僕たちの世界では君しか英雄にはなれないんだから。だからさ、僕たちの世界に来て、力を貸してよ。その特別な力を僕たちのために使ってよ」

「有意義、ねぇ」

少なくとも、彼女いない歴＝年齢のまま二十歳を迎え、焦燥の余りに金の力で童貞卒業を図ろうとしている今の自分よりは、確かに有意義な生活を送れるのかもしれない。二流、三流の私立大学でぐうたらな学生ライフを送っている自分が英雄になれる可能性など皆無なのだから、この意味不明な小動物の誘いに乗っかった方が有意義な人生を送れるに違いない。

しかしである。

そんな都合のいい話があるだろうか。
こんな、どこにでもいる、甲斐性なしの童貞男が英雄になれる世界などあるはずがない。そもそもこんなくだらぬ平凡男のどこにそんな力があるというのだ。
冷静に考えていくと、あり得ないという結論に至る。
ならばこれは……。
ドッキリ、という単語が光太郎の脳裏をよぎっていく。
まあ芸能人でも有名スポーツ選手でも有力な政治家でもない自分にドッキリ企画を仕掛けるような暇なテレビ局もないだろうが、可能性として皆無でない以上、それしか考えられなかった。童貞を卒業するべく意を決して風俗店に赴こうとしている自分をバカにするべく、友人たちが画策したことかもしれない。一応、仲の良い友人には、今日風俗に行くことは伝えてあるのだ。
もしこれがドッキリであるとすれば、全ての事に説明がつく。この喋る小動物も、金のかかった玩具だろう。
だが……。
肝心なカメラや盗聴器のようなものは、全くどこにも仕掛けられていない。そもそも、この車は自分の車で、車の鍵は常時持ち歩いている。よほど凄まじい技術力がない限り、車内に入りこむことは不可能な上、所有者である自分の許可なく車内に侵入すれば、それはれっきとした犯罪だ。テレビ局が、そんな冒険を侵すとは思えなかった。

「なあ、これってマジ話なわけ？」

気が付くと、赤信号は青になっており、光太郎は車を発進させると、すぐそばにあったコンビニの駐車
場に停車させた。
その上で、彼は真っ白な小動物をぎろりと睨みつけ、そんな風に尋ねた。

「もちろん」

小動物は満面の笑顔で、きっぱりと断言した。嘘をついているようにも、冗談を言っているようにも思えない。

「……それでさ、一つ試みに聞くんだけどさ」

光太郎はごくりと息を飲み、フゥと静かに深呼吸した。

「なんだい？」

小動物はそんな彼を不思議そうに見上げた。

「英雄になったらさ、その、お、女とかに、もてたりするのかな？」

モテる、という経験がこれまでの人生で皆無な光太郎にとって、それは結構重要な疑問だった。しかしながら、この小動物に答えられる類の疑問ではなかったようで、

「……」

返ってきた答えは無言だった。

「い、いや、今のなし。忘れて」

英雄は色を好む。そんな言葉がある。

英雄になれば、女は選り取り見取りなのだろうか。そもそも、彼の言う世界の女性とは美しいのだろうか。

いずれにしても、わざわざお金を払って、強引に童貞卒業を果た

すよりも英雄となって正々堂々と童貞卒業を成した方が格好いいかもしれない。
甚だ不純だが、光太郎の心は次第に異世界へ赴く方へ傾いていった。そもそも、彼にはこの世界にそれほど未練はないのだ。実の父母は幼いころに死んでしまっていないし、育ててくれている叔父夫婦とはそんなに仲が良いわけではない。友達も多くないし、彼女は当然いない。兄弟もいない。ならば、英雄となり、格好良く童貞を卒業できる異世界へ赴いた方が人生バラ色じゃないか。

「でさ、俺には具体的にどんな力があるわけ？　自分で言うのもなんだけど、俺って結構、駄目な奴だと思うんだ」

駄目かどうかはともかく平凡な人間であることは確か。
そんな自分にどんな力があるというのだろう。この小動物は、自分だけが英雄になれると言った。自分は特殊な力を持っているから、その力を異世界で是非使って欲しいと言った。しかし、当然、光太郎自身にはそんな自覚は全くない。

「君には力があるんだよ。そうでなければ、僕は君にこんな頼みごとはしないよ。僕はこう見えて、神の使者なんだ」

光太郎の結構切実な問いに対する小動物の答えがこれである。

「……そりゃそうだろうけど、具体的にはどんな力が俺にあるのかって聞いてんだけど」

改めて問い直してみても、小動物はなぜか無言を貫いてくるのだった。

「……まあいいや、で、具体的に俺は何をすればいいわけ？

異世界に行って正義の騎士にでもなればいいのか？　悪の大魔王を特殊な力とやらでねじ伏せればいいのか？」

ありがちな勧善懲悪物のドラマや映画、アニメを脳裏に思い浮かべ、光太郎は「ははは」と苦笑いした。

「そうだね。まず、僕の国、ヴェスパニア王国が危険な状態にあるから、まずはこれを助けて欲しいかも。その後は、五〇〇年間も続いている銀河系の戦乱に平和を取り戻して欲しいんだ」

小動物はそんな風に言いながら、もぞもぞと忙しなく動き始め、瞬く間に車の周りに一種の円陣を描いた。

そして、

円陣が黄金色に輝きだしたかと思うと、外の動きが次第に緩慢なものへと変化していき、最終的に完全にストップした。それまで街道の上を次々と過ぎ去っていった車が、スピードを保ったまま静止しているし、歩いている人間も、その場に固まっている。

「な、なんだ、これは？」

驚く光太郎は、

「な、なにがどうなっているんだ？」

呆然と座席の上に座り尽くしている。

「じゃ、行くよ。あ、そうだ。一つ言い忘れていたけど、時空を移動している間に人間の体は幼児化しちゃうんだ。たぶん、召喚が完了したころには、君は赤ん坊になっているだろうね。でも大丈夫。成長すれば自然と記憶は取り戻すから」

既に異世界への移動は始まっているようで、完全に停止していた世界が突如まばゆく真っ白に輝きだすと、光太郎は初めて自分が別世界へ向かいつつあるのだということを実感した。

が、それ以前に。

小動物の突然のカミングアウトに、彼は驚いた。

幼児化し、赤ん坊になる？

聞いてない。そんな話は聞いてない。しかし、今更「やめて！」とは言えないし、言ったところで聞き入れてはもらえないだろう。英雄になって正々堂々童貞を卒業したい。たったそれだけの理由で、異世界へ行くことを決意した自分を、今更ながらに後悔し始めていたが、時既に遅しである。

そうこうしているうちに時空移動は着実に進んでいき、上村光太郎の意識は彼方の先へと消えていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3494ba/

銀河戦記　～童貞男は英雄となってリア充を目指す～

2012年1月9日00時50分発行